

多賀の国の物語 5

多賀の戦国

多賀のお城編

近江が最も躍動した時代が戦国時代
多賀も激動の戦国時代を迎えます

近江の覇権をめぐり様々な勢力が多賀で衝突しました

京極VS六角
六角VS浅井
浅井VS織田
織田VS明智

これらの歴史の断片を多賀のお城に語ってもらいましょう



明智光秀公

口伝の地

十兵衛屋敷跡

10-13 30

眠りから覚めた謎の巨大城郭

おおりにゆうだにじょう
男鬼入谷城

山城を単純に表現すると、尾根を削り平坦面を造り(郭)、郭の周りに土塁等を巡らせ、廓と郭の間に堀切を刻み、斜面の要所に豎堀を刻む。となります。通常の遺跡が土の中に埋もれて地表から見えないのに対し、山城は地形の凹凸として判断しやすい遺跡です。よく知られた山城は、既に江戸時代の地誌類に紹介されているのが普通です。ところが、彦根市と多賀町の間の中にある「男鬼入谷城」は、平成に入ってから発見された山城です。小さなお城で気が付かなかった?しかし、その規模は、東西200mを超え、ここから北に延びる3本の尾根にも100m近くに渡り、縄張りされる、巨大城郭なのです。当然名前も伝わっていません。城の名前は彦根市男鬼町と多賀町入谷にまたがっているので付けられた仮の名前です。

見つからなかった理由は、普通の山城では考えられないほど山奥にあったためです。山奥・僻地という表現は、現代の文明的な感性から来る表現です。このお城が造られたのは16世紀中頃、築城者は定かではありませんが、城の規模から判断すれば、広域を支配する力を持つ者。とするならば、江南の六角氏、江北の浅井氏との抗争を繰り広げていた「京極氏」が最も妥当性があるとされています。伊吹山の麓に本拠を構えていた京極氏は、度々多賀・甲良に侵攻し、六角氏と戦っています。現代の感覚からすれば、東山道(近世は中仙道・現在は国道21号・国

道8号)を通り、彦根を経由して多賀に至りますが、京極氏が選択したのは、極端に表現すれば、地図に伊吹と多賀を結ぶ直線を引き、ここを移動するルートです。

峠を越え、谷に沿って侵攻する。車を前提とすれば不可能な通路でも、人間が二本の足を動かして移動する分には、山坂は障害ではなかったのです。こう思って、お城から見おろすと、多賀の工業団地がよく見えます。湖東に攻め込むための拠点として整備されたのが、男鬼入谷城なのでしょう。

お城探訪の醍醐味は、山肌に刻まれた縄張りの観察にあります。このお城は壮大な石垣こそ持たないものの、尾根に深々と刻まれた「堀切」、尾根の先端に執拗に刻まれた「畝状豎堀」、郭の周りをほぼ垂直に切り落とした「切岸」等、築城に投入された圧倒的な土木量に目を見張ります。同時に彼らをここまで駆り立てたのは一体何なのかを、考えさせられてしまいます。

このお城は、男鬼集落から比婆神社に登り、さらに比婆山の山頂からゆるい谷を越えた山上にあります。一般的な観光コースではありません。道をよく知っている人の案内と、十分なトレッキング装備が必要です。しかし、しんどい思いをして登った苦勞を忘れさせる、絶景と感動が待っています。

男鬼集落より徒歩90分でお城。男鬼より比高差約300m



男鬼入谷城



男鬼入谷城

婆娑羅の城

勝楽寺城



勝楽寺城



高源寺山門

勝楽寺城が乗る勝楽寺山は、標高はそれほど高くはありませんが、湖北から湖東の平野を一望できる絶景の山です。麓の勝楽寺には、婆娑羅大名として名を馳せた「京極道誉」の館があったとされ、勝楽寺城はその詰めの城から始まったと考えられています。ただ、山頂からの景観、ここから生まれる谷川や、登城道の途中にある神仏の祠などから考えれば、山頂は近江平野を見下ろす神の聖地であり、この神の力を借りるため、武家が城を築いたのでしょう。多賀町の榑崎から勝楽寺山を見ると、神が好んで宿る、典型的な神奈備型の山であることが判ります。

縄張りは、尾根上に8カ所の廓を並べた単純な構造ですが、一番高い郭の周りには石垣が巡らされており、道誉が去った後、在地の武家が改造したものと考えられます。

多賀町高源寺は、神奈備山としての勝楽寺山の麓に立ち、この山を意識したお寺であることを窺わせます。このお寺に、直接勝楽寺城とは関係ありませんが、石田三成の佐和山城から移築されたという言い伝えのある薬医門が一棟残されています。門の高さが高く、如何にも城門という雰囲気のある建物です。お城探訪の帰りに是非お立ち寄りください。

バリアフリーの城郭探訪

敏満寺城と久徳城

お城の探訪には山道・石段がつきものです。「お城は楽しいけど、しんどい思いをして歩くのは嫌」という方にお勧めなのが、敏満寺城です。何と、名神高速道路多賀サービスエリアの中にあるのです。

城の名前となっている敏満寺は、平安時代に創建された天台系の寺院です。近くに湖東三山がありますが、元はこれらの寺院と肩を並べる、いや、それを凌ぐほどの規模を持つ寺院でした。これらの天台系寺院は、加持祈祷による寄進により、広大な土地を得て、ここから莫大な利益を上げ、宗教都市的な様相を帯びていました。財が集まれば、狙う者が現れる。狙うものを撃退するには軍事力が要る。だから城が要る。

敏満寺と敏満寺城は、浅井長政の攻撃を受け焼失します。この時、敏満寺に味方した久徳城も、落城します。久徳城跡は、多賀町久徳集落の中に、その一部が残されています。

敏満寺はすぐに復興しますが、今度は、織田信長による攻撃を受け壊滅し、以後立ち直ることはありませんでした。

現在、城の一部は、SA内の公園として整備されています。バリアフリーの城郭探訪をお楽しみください。



敏満寺城



久徳城

明智光秀の館が多賀にあった

佐目十兵衛屋敷

明智光秀が多賀の出身かもしれないという、素敵な史料が見つかり注目されています。江戸時代の始めに記録された近江の地誌『淡海温故録』の中に「昔、美濃の国に明智十左衛門なる者がいたが、近江六角氏に仕官するため多賀の佐目に住み着いた。その子、明智十兵衛は、六角氏を離れ越前の朝倉氏に仕えることの望み佐目を出た。越前への途中、川流れの大黒天を拾った。無事朝倉氏に仕官し、川流れの大黒天の功德が1000人の頭になれる、ということを知ると、望みと違くと反発し、新興著しい織田信長に仕官し、認められ大名に取り立てられた。徳川家康の接待の不手際をとがめられた時、甲斐の武田と結び信長を倒そうとしていたことが発覚したと悟り、謀反に至った。この時、多賀・久徳といった[昔の古き好身^{よしみ}]が光秀の味方をした」といった内容です。

光秀の前半生に関する良質な資料は無く、多くは軍記物(合戦小説)の『明智軍記』に拠っています。『淡海温故録』も創作的なところがあり信頼性は低いけれども、『明智軍記』よりも古い記録です。五十歩百歩ですが、光秀が多賀の出身であるといっても、これを明確に否定できる史料はありません。

佐目には、光秀が暮らした「十兵衛屋敷」の跡や、氏神に供える水を汲んだ「神様井戸」などの遺跡が残されています。是非訪れて、歴史の謎ときにチャレンジしてください。



十兵衛屋敷跡



十兵衛屋敷十二相神社

